

肖像画と読書

岩井 淳

数年前の晩秋、私は、上野の西洋美術館で開催されているルーブル美術館所蔵の肖像展に出かけた。この美術展では、古代オリエントから19世紀に至るまでの肖像画や肖像彫刻が陳列されており、西洋の肖像表現を知る絶好のチャンスだった。130余点にも達する力感あふれる作品に接して、私の印象に残ったのは、肖像画や肖像彫刻のまなざしだった。作品には、ナポレオンのような権力者のものから、名もない女性や庶民、また子供から老人に至るまで様々なものがあり、それらのまなざしは、見る者を圧倒する権力者の視線から、情熱を内に秘めた静かな目線まで多様であったが、それらに共通して感じられたのが、相手をじっと見すえるまなざしであった。

まなざしは、もちろん、画家や彫刻家によって表現されたものであるが、芸術家によって描かれた有名・無名の人物の個性を、雄弁に或いは静かに語りかけてくる。人物のまなざしは、芸術家の視線と互角に対峙し、そのことによって芸術家との間に緊張感をはらんだある種の対話が成立し、芸術作品が完成する。その芸術作品（肖像画や肖像彫刻）は、時をへて作品を鑑賞する人々との間に、再び対話を成り立たせ、作品に接する20世紀の日本人にまで、何ものかを訴えてくるように感じられた。

こうした印象は、西洋における個性や個人主義の問題と関係があるかもしれない。日本では、突出をきらう「横並び主義」の風潮が支配的であり、強烈な個性は忌避され、個人主義という言葉も誤解される傾向がある。先日、テレビを見ていたら、夏目漱石の「個人主義」にふれ、それをエゴイズムと解釈していたのには驚かされた。いかにも、日本的な解釈である。しかし、漱石自身は、「個人主義というものは、決して俗人の考えているように国家に危険を及ぼすものでも何でもないので、他の存在を尊敬すると同時に自分の存在を尊敬するというのが、私の解釈なのですから、立派な主義だろうと私は考えている」（『私の個人主義』）と述べている。漱石の「個人主義」は、イギリス留学を契機に形成されたといわれている。その背後には、彼の西洋文明に対する劣等感と敬意が同居したアンヴィバレントな感情があり、西洋文明との対峙、或いは真摯な対話があったことは言うまでもないだろう。

肖像画と鑑賞者との関係や西洋文明と漱石との関係は、本と読者との関係に、どこ

か似ているかもしれない。本は、読者の働きかけによって我々に何かを語り、本と読者との間には対話が成り立つ。両者の対話が実り豊であればあるほど、その本は読者にとって役立つものとなるだろう。その対話の中には、友人と語らう時のように心なごむものや、恋人と愛をささやきあう時のように情感を豊かにしてくれるものなど様々であろう。しかし、そういった親しみのもてる気楽な本とばかり対話するのではなく、学生諸君には、強烈な個性をもった相手と接することを、ぜひとも薦めたいものである。ジャンルはもちろん、文学でも哲学書でも歴史書でも、社会科学系の本でも自然科学系の本でもかまわないけれど、できるなら、歯ごたえのある分厚い個性をもった相手がいい。いままでの自分の生き方や考え方をまっこうから否定するような知的刺激に満ちた本と出会えるならば、それはむしろ貴重な体験というべきだろう。自分を変えようとすることや従来の考え方が変わることを恐れる必要はないのだ。

幸いにして、静岡大学の図書館では、70万冊に及ぶ本が君たちとの対話を待ち望んでおり、学生用の開架図書として手招きしたり、書庫の中でじっと待ち続けている。それらの本のテーマは、古代ギリシャの天文学から現代の南北問題まで及び、その著者や登場人物は、日本人だけでなく、ヨーロッパ人やアメリカ人、朝鮮人、インド人など多様であり、時に彼らは、英語やドイツ語、フランス語、さらにはロシア語や中国語で語りかけてくる場合だってある。相手としては不足のない、いずれ劣らぬ強烈な個性の持ち主たちが、図書館のそこここに控えているのである。

それらの本と対話する時、私たちは相手の鋭いまなざしに気おくれして、視線をずらしてしまうこともあれば、相手のまなざしを受け止め、こちらから何かを話しかけられる場合もある。要するに、対話する相手（作品や著者、登場人物）は、不動のように見えるけれども、問いかける私たちの姿勢次第で、心を開き、本心を語ってくれるものなのだ。本を読むということは、逆に読む側のまなざしや個性がためされる、実にしんどい作業なのかもしれない。しかし同時に、深い霧の合間から相手の顔が見えた時には、これにまさる喜びはないと言えるような、楽しい営みでもあるだろう。恐れずに、本の森に分け入り、強烈な個性の持ち主たちと対話してみては、いかがだろうか。

(人文学部・西洋史学)

図書館員となって

情報管理課長 谷口 渉

6月も終わろうとしていたある日編集員から締め切り間近であるが着任に当たっての抱負などを一言と・・図書館通信の原稿依頼があった。生来の筆無精の私ですのでどんなものが書けるか心配ですが、意を決して原稿用紙に向かっている。着任して3

カ月経過した現在の感想などを記してお許しいただこうと思います。

さて表題は『図書館員となって』としておりますが、本年4月1日付けで熊本大学から転任し、本学の図書館員となった。確かに勤務ヶ所が附属図書館であり図書館員であることには変わりがない訳ですが、図書館業務に携わった経験は大学に採用されて以来30年余の間全くありませんので、学生諸君及び教職員の方々から図書館資料に関する問い合わせ等（所謂図書館サービス依頼）があったとしても何等答える術を知りませんので、厳密には諸氏が考えておられる図書館員ではないものと思う。しかれば何をするのか・・・となる訳ですが、図書館員には資料の提供（サービス）を受け持つ部門と館長以下主として施設の管理及び事務を担当する部門とあるが、通常このサービス部門及び管理部門を含め図書館員の業務と称しているものである。については管理部門の一員として感じたことを以下に述べさせて頂くこととする。

静岡大学自己評価実施委員会が平成5年3月発行された『静岡大学の教育と研究』の中に附属図書館に関する事項がある。「施設・設備」の項には次のように記載されている。「昭和58年度に分館（浜松）の増築、昭和59年度には本館書庫の増築が行なわれ、現在に至っているが、受入図書の増加のためそのスペースはほぼ限界に達しつつあります。特に本館書庫は狭く、利用に支障をきたすほどであり、閲覧室、視聴覚室を含めての改築と増築の検討が急がれています。また本学の長期計画の上では図書館の増築は第2期の最終年度（平成11年度）となっておりますが図書館資料の管理上、この計画の見直しが必要に思われます」と指摘されている。

このことにより平成4年度末においての蔵書数876千冊（本館727千冊、分館149千冊、図書館員一人当たり25.8千冊、同規模大学の図書館員一人当たりの平均21.6千冊）であること、また、奉仕対象学生数は10,914人（本館8,753人、分館2,161人、図書館員一人当たり321人、同規模大学の図書館員一人当たりの平均209人）であり、これにより試算すると図書館本館の書庫、閲覧室等の増築の必要面積は1,848㎡となる。このため以下の事由により2～3年前から概算要求事項に計上し要求を続けているものである。

要求事由

① 附属図書館の既設建物は、昭和43年に建設された後、昭和53年に増築されたものである。

② 昭和54年以降、蔵書冊数の急速な増加に伴い、収蔵スペースが既に飽和状態で限界に達しており、業務に重大な支障をきたしている。

③ 学生及び教官定員の増加に伴い、閲覧スペース及び座席数についても不足を生じており、利用者サービスにも支障をきたしている。

④ 近年、学術情報システムの進展に対応して、業務の電算化を積極的に進めるとともに、ニューメディア等を利用した新しい情報サービスを展開しており、これらの業務及びサービスに伴うスペースが新たに必要となっている。（6ページにつづく）

本館4F端末コーナーが拡大

4月から学内LAN接続端末が2台増設されました。端末コーナーは、新しいシステムに戸惑いながらも、いろいろと挑戦する利用者で賑っています。

「あった」と書架へ飛んで行ったり、がっかりした様子だったりしますが、探した資料が見つからない理由としては、本館に未所蔵の場合と、検索方法が不適切な場合の2通りが考えられます。

「無いわけがない」ものは「有るはず」です。

図書館通信新設「静大所蔵図書発見コーナー」で再度挑戦してみてください。既設の利用者用端末①、②「LOOKS/U」では、或いは、「これまでのあなたの検索方法」では見つからなかったものでも出てくるかもしれません。

「LOOKS/U」端末と学内LAN接続端末

静岡大学附属図書館では、1988年度から、図書館専用機（日立LOOKS/U）による電算目録を作成し、利用者用にも「LOOKS/U」の端末を設置し、オンライン目録を提供してきました。

1990年5月には、情報処理センターとの共同運営により、「学内LAN」経由で「日本データ・セナル学内蔵書検索システム」も利用できるようになり、研究室からの学内蔵書検索が実現しました。

今年3月末には、端末コーナーにも学内LAN接続端末が2台設置されました。静大蔵書検索用端末の不足を少しでも補うことが目的ですが、既設「LOOKS/U」の使いにくさをカバーする面も数多く持っています。

【静大所蔵図書発見コーナー 1】

著者名による検索

「まず端末選び」ですが、入力できる文字の数・種類、検索キーの多様さから、利用者用端末③、④「日本データ・セナル学内蔵書検索システム」（以後「NDGシステム」とする）による検索をお勧めします。「次に蔵書目録の構成とNDGシステム」を知ってください。

1. 出版年を見る。

1987年以前出版の場合には、必ず、カード目録も検索して下さい。

（1987年以前所蔵分は、原則としてコンピュータ目録には入っていません）

2. 「NDGシステム」の検索方法を把握する。（「LOOKS/U」の検索方法とは異なります）

2.1 入力法の基本を押さえる。

2.1.1 文字の入れ方

調べたい言葉や名前をスペースを挟んで並べていく。コンピュータは入力された文字の全部を含むものを捜してきます。

2.1.2 使用文字

2.1.2.1 文字の大小

どちらでもよい。

2.1.2.2 濁点・半濁点

発音のとおりにつける。（「LOOKS/U」の場合には、「大学」、「退学」、「対角」が、「タイカク」で同時にヒットしてしまう）

2.1.2.3 音標符号

アクサンやウムラウト等の音標符号付文字は符号を除いた形とする。

2.1.2.4 文字数

制限無し。前方一致検索となっているので、曖昧な場合には明確な部分までを入力する。

2.2 著者名の入力法

2.2.1 姓と名の間をスペースで区切る。(ヨミでも漢字形でも可)

2.2.1.1 ヨミ

発音のとおりに入れる。(2語の連合または同音の連呼によって生じた「ヂ」「ヅ」は「ジ」「ズ」とする)

(例)「手塚治」は「テヅカ オサム」(「テヅカ オサム」ではゼロ件)

姓、名の順序はどちらでもよく、ユニークな語が先の方が速く検索できる。

2.2.1.2 漢字形

姓名の順序でスペース無しで続けて入力すると、同姓同名しかヒットせず、一般的な人名の場合には効率的。

2.3 西洋人名は原綴(キリル文字は翻字形)

カード目録や「LOOKS/U」同様、西洋人名は原綴でしか検索できません。

資料にカナしか記入されていない場合には、4F「参考図書人名事典コーナー

①」の外国人名事典等で調べてから入力する。

2.3.1 西洋人名の場合も姓名をコンマ、スペース無しで続けて検索できる。

(例) Smith Adam (Smith Adam とスペースを間に置いた場合には、Adam氏とSmith氏の共著も同時に検索してしまう)

2.4 共著者は同時に検索できる。

(例) ①ナカムラ ヤマグチ ②上山 小原

3. 効率的な検索法

検索後、利用したい図書の「請求記号」を控える時に、「図書ID」も同時にメモする。書架上に資料が無かった場合には、端末①、②「LOOKS/U」の「図書番号」項目に「図書ID」を入力し、検索すると貸出状況が分る。書名や著者名での検索では、遅くて使い勝手が悪い「LOOKS/U」ですが、瞬時に検索できます。

4. 画面操作

再入力の場合、文字削除や上書き等で画面上は変化していても、新たな検索キー入力画面になっていず、検索結果が0件になる場合があります。おかしい時には、一旦「メニュー画面」に戻り、

1.和図書か、2.洋図書を選び直す方が確実です。

5. 「NDG検索システム」は学内LAN接続で研究室からも検索できます。

6. 「LOOKS/U」での著者名検索では入力方法が異なるので注意して下さい。

「おれ、けんず、アウ」では捜せない「LOOKS/U」

「LOOKS/U」の著者名検索キーは、半角文字で作成され、最長10文字ですから、「大江健三郎」では勿論、「おれ、けんず、アウ」もはみ出して入力できません。仕方なく「おれ、けんず、ア」までを入れて検索する方がほとんどですが、これではヒットしません。

「LOOKS/U」では濁点が無くてもよいのではなく、有ってもよいということで、検索キーそのものは濁点無しで作られています。

この場合には、濁点加わることにより8文字しか入力できず、検索キーと一致しくなり検索不可となったわけです。「おれ、けんず、アウ」でようやく検索できるのですが、途中で「*」を付けてもヒットします。

外国人名等、文字数が多く、途中で切れる場合がありますが、「LOOKS/U」の検索キー(最長10文字)と一致しているので検索できます。

(3 ページより)

次に人の問題について少し述べさせていただこう。

図書館情報のサービス提供には図書館情報に関する十分な知識を持った専門職員(司書等職員)及びその他の専任の職員が担当することとなるが、本学の図書館員数(分館を含む)は、定員内職員23人、非常勤11人であり、同規模大学の平均(定員内28人、非常勤職員16人)に比して少ない。このことにより図書館員一人当たりの業務量は、蔵書数及び奉仕対象学生数においても大幅に上回っていることから、本学の図書館員の業務量がハードであることがご理解いただけるものと思う。

このように本学の附属図書館は種々の問題を抱えているところであることを諸氏にご理解いただき一日も早く施設の拡充・整備等が図れるよう祈念する次第である。

最近の図書館事情

情報サービス課長 能村 浩次

私は本をよく買う。だが、転勤や引越しが多くなってくると、荷物になってしまっ
て困ってしまう。勢い、図書館に期待したくなって、図書館は時々使わして貰っている。何か調べ物をする時は先ず図書館に出かけてみる。でも、新刊書は書店で買ってしまう。図書館と本屋さんとの距離を比べて、書店の方が近ければ、本を買いに行ってしまう。「また本が増えた」と思ってしまう。最近では古本屋さんもほとんどない。あるいは、あった場合でも、売れ筋の本でなければ引き取ってもらえない。使い終わった本は、ただのゴミと化してしまう。「高いお金を払ったのに、もったいない」と思ってしまう。

私の場合は、図書館を活用しようとしてもなかなかうまくいかない。図書を探しに行っても目的の図書がなかったり、最近の新しい本がなかったり、図書が古くて使えなかったり、図書カードを使うには、書名か著者名が判明していなくては役に立たなかったりするからであるが、誠に残念である。むろん、例えば出版された本の全部を保存できる図書館はほとんどないわけで、しかたがないことではあるが。

余談ではあるが、この点最近の公共図書館、とりわけ市立の図書館は、図書資料の評価方法を確立したのかどうか、古い本は大概書棚から姿を消している。新刊図書を中心に配架することで、利用者の需要にかなり答えているような気がして感心している。結果として、図書館へ来て読書をし、図書の貸出を受け、ビデオをブースで見る人がかなり多いように感じた。日曜日ともなると、こども連れの親が図書館を出

入りする光景にもよく出会ったりする。

昔の図書館は、一般から遠ざかっていたように思う。どこの図書館でも、利用者の大半は高校生、大学生であった。あるいは、利用者の姿はほとんどなく、館内はガランとしていた。図書館を利用するのは、読書用の机があるから、静かな環境だから、友達がいるから、冷房があるから・・・だった。ところが、ニューメディアと図書館が結び付いたことで、今、図書館は変わりつつあるように思う。

図書館専用システム、検索システム 書名、著者名をあらかじめ調査しておかなくても、キーワードだけで検索してみることができる。とても便利なものである。図書の貸出は、貸出証を添えて受付に出せば、貸出手続きが終了するようになった。自動入退館システム、自動貸出、返却システムとの組合せで、無人化を目指す図書館もでてきている。

データの相互交換により他の図書館の蔵書が検索できる 実際には、磁気テープによるデータの交換、あるいはオンライン等で実施する。CD-ROMにデータを詰め込んであるものの方が利用し易く、費用もかからないが、CD-ROMの製作には多大な費用がかかる欠点がある。他の図書館の図書の場合でも図書の所在がわかれば、そちらへ出向く、あるいは文献複写の依頼等での利用方法がある。このため、今日の国立大学図書館では、文献複写等の相互協力は最も期待されている機能であり、大切な業務となりつつある。

ビデオ資料 テレビ等の映像文化の時代を反映して、テレビ番組で放映されたものの中から、出版物が生まれてくる。書店の本棚にもビデオが並ぶ時代である。図書館資料の多様化が進んでいる。

パソコンの普及 ゲームソフトの任天堂やセガが急成長企業として、注目を集めている時代である。機器の性能の向上、低価格化、良質、多様なソフトの登場によって、図書館では情報の伝達手段、保存手段として取り込むことが行なわれている。特に、フロッピーディスクやCD-ROMの稼動装置として必需品となっている。

エレクトロニック・キャンパス 4～5年前から、エレクトロニック・キャンパスということが言われ、大学は情報の発信基地である（あるいは発信基地とならねばいけない）と言われるようになった。技術的な問題もあるし、予算的な問題もあり、簡単なわけにはいかないかもしれない。

しかし、図書館は今のままでよいと考える利用者は少ないであろう。せっかく図書館があるのなら、図書館に予算をかけるなら、使い易い図書館であってほしい。新しい情報、国内の、海外の最新情報を提供してくれる図書館であってほしい。図書館が次に目指すもの、情報化社会が定着しつつある今日、それはニューメディアに即応した図書館であろう。保存を主体とした図書館、本を主体とした図書館は、大きな変化をとげるだろう。

●人事異動

(新任: 5. 7. 1 付)

小澤康彦 館長 (人文学部教授)

(退任: 5. 6. 30 付)

吉本健一 館長 (教養部教授)

(配置換: 5. 4. 1 付)

谷口 渉 (熊本大学経理部情報処理課
長→情報管理課長)能村浩次 (長岡技術科学大学教務部図
書課長→情報サービス課長)塚本雅美 (運用係長→浜松分館管理運
用係長)

(昇任: 5. 4. 1 付)

山本 孝 (洋書係→運用係長)

(配置換: 5. 4. 1 付)

溜淵文子 (参考調査係→和書係)

藤田 洋 (和書係→洋書係)

米津友子 (洋書係→参考調査係)

(採用: 5. 4. 1 付)

渡邊通江 (洋書係)

●平成5年度図書館委員会委員

館 長 小澤康彦

分 館 長 清水 孝

人 文 学 部 平野克明 坪本篤朗

教 育 学 部 金井省二 新保 淳

理 学 部 増田俊明 飯島欣哉

工 学 部 中山 顕

農 学 部 小島義夫 糠谷 明

教 養 部 林部敬吉 高野 優

電子工学研究所 伊ヶ崎康宏

木下治久

電子科学研究所 渥美邦夫

喜多尾道火児

法経短期大学部 土田和博

本 部 守屋 尚

附 属 図 書 館 鈴木彬司

●平成5年度図書館業務電算化委員会

館 長 小澤康彦

分 館 長 清水 孝

人 文 学 部 平野克明 岩田 礼

教 育 学 部 金井省二 堀江雅幸

理 学 部 小沼茂樹 飯島欣哉

工 学 部 清水 孝 中山 顕

農 学 部 小島義夫 糠谷 明

教 養 部 高野 優 石田俊正

法経短期大学部 土田和博

電子工学研究所 木下治久

電子科学研究所 渥美邦夫

附 属 図 書 館 事務部長

情報管理課長

情報サービス課長

学術情報係長

●平成5年度「図書館通信」編集委員

館 長 小澤康彦

農 学 部 糠谷 明

法経短期大学部 土田和博

図 書 館 小浜 進 中島規恵

畠山百合子 真中進

静岡大学附属図書館報

発行所 静岡大学附属図書館

印刷所 (株)黒船印刷

第24巻第1号 (通巻104号)

静岡市大谷836

静岡市登呂二丁目4-25

1993年7月26日

TEL 054(237)1111

TEL 054(286)0236